

ると同時に亦政治的なであります。

(ケルミツシエ・フォルクスツァイツング紙一九三二年四月二十四日所載)

28 日支事變、觀たまゝ

フロイド・ギボンズ氏

時代は移つて太平洋沿岸は今や米國の表支關となり、紐育方面が却つて裏口になつて、米國は支那に巨額の投資を行ひ多數の米國人も其處に居住する。米國艦隊が擧げて太平洋に集中されつゝあるを見ても此の間の消息が窺はれる。

今次日本が滿洲方面で強硬政策に出たことは敢て異とするに足らぬ。要するに日本は歐米の遺口をマネてゐるだけの事、三國干渉で日本に教訓を垂れた歐米側が今更らそれを批難したとて到底日本が承服するものではない。

滿洲で幾多の挑發を被つたことを理由に、日本は尨大なる支那の席捲を試みてゐる。然し支那といふ國は古來幾度か外寇を受け、其の征服を被りながら何時の間にか征服民族を同化し去るの特徴をもつてゐる。支那の絶大な人的資源に抗して之を征服することは殆んど不可能だ。無限の人口、底知れぬ繁殖率は黙々として支那の威力を物語り、世界はやがて支那人の生活力、生殖力に征服される時が來るといふ感想を起させる。

其の國民性に於て日支兩國人間には著しい相異がある。私の觀察した所では、支那人は米國人と同じくユーモアを解する人種で、個人的に憎めないし、彼等の間に伍しても何等窮屈を感じない。之に反して日本人は幼時から忠君愛國の念を涵養されてゐる爲めか生真面目に失し、ユーモアはわからず、親しみ難い人種である。滿洲、

上海の日本人は悉く興奮し、専ら君國に殉せんとしてゐる。皇帝は彼等の天帝であり、其の愛國心は狂信的宗教心と解するの外はない。此の國民性は米國として注意せねばならぬ(肉弾三勇士の挿話を細叙する所があつた)。對日ボイコット運動が米國に起つたことを私は上海滞在中に知つて我が國人の輕舉妄動に一驚を喫した。日支事變の根因は此のボイコットである。支那の對外ボイコットは今に初めぬ事ながら、日本に對する今回のそれが特に猛烈だつた結果戦争になつたのであつた。一月二十八日の上海戦争で、日本軍部は外交官と別行動を執つた。支那側では日本の全要求を容れたに拘はらず戦争になつたのは日本軍部の特異の立場に起因する。上海の出先軍部が外交官の方策を打破するといふことも無いとは限らぬ。

上海の日本軍は軍容も整つてゐたし強くもあつたが、由來口舌の難たる支那側の軍隊は武力に於て遙かに見劣りがした。然しそれも境遇の然らしむる所、支那としては辯舌で立向ふの外致し方がないのだ。世界の輿論は日本に不利に轉じ、日米間の空氣も頗る悪化した。上海在留米人の權益を保護すべく米國亞細亞艦隊旗艦ヒューストン以下艦船並に歩兵聯隊が其の任に就いてゐた。日米の衝突は危機一髪に繋がり、昔て米西戦争の導火線となつたメーン號の爆沈事件に似通つた水雷の爆發が黃浦江に起つた。支那から最も米國に近い海軍根據地は布哇であるがその布哇と支那とは數千哩を隔てゐる。こんな所に艦隊を置くことは居留民を保護するよりも寧ろ之を危険に曝すものである。

日本の出先軍部の態度は端倪すべからざるものがある。カール・フォン・ウイーガンドが奉天で本庄將軍に會つて、錦州攻撃計畫の有無を尋ねたら、將軍は攻撃の意志なしと答へた。然るに其の翌朝、日本軍の盛んに出動するのを見た。行く先はと問へば錦州だといふ。私は慌てて從軍した。

奉天に戻つてから私は又本庄將軍に北滿進出計畫の有無を訊したところ、將軍は言下にさる意圖なしと答へ

た。由つて私は一番列車でハルビンに駆け付け、日本軍のハルビン入に辛うじて一步を先んじ得た。上海事件は私の歸米の途次に突發したものである。上海の日支戦争は要するに獨逸流の戦法の現はれで、殊に江灣鎮の戦ひの如きは、日本側は一九一四年の獨逸さながらの攻撃法を採用し、支那亦一九一八年の獨逸流の防禦法を採つた。事變がどう結着するか見据えはつかぬけれど、米國が推さへを免かれたのは米國の出先陸海軍將士が能く冷靜を持した爲めである。米國は只管、軍縮條約の範圍内に於て軍備の充實を圖り、他國に乘すべき隙を見せず、萬一の際に備へねばならぬ。平和論者は戦争防止の具たる軍備を排斥しながら、戦争を誘致する所のボイコットを唱へてゐるが自家撞着も甚しい。ボイコットを口にするは容易である。然し戦争を覺悟の前でなければボイコットはやれるものでない。

(キボンス氏はハースト系新聞の通信員であるが、福東歸來匆々去る四月六日夜樂港市公會堂に於て市長司會の下に約五千の聴衆に對して大約右の講演を試みた。)